

## 令和 2（2020）年度マダラ根室海峡の資源評価

水産研究・教育機構 水産資源研究所 水産資源研究センター

参画機関：北海道立総合研究機構 釧路水産試験場

## 要 約

本資源は、日本では沿岸漁業によって漁獲されている。その漁獲量は 1996 年漁期（1996 年 4 月～1997 年 3 月）に最高値となる 8.2 千トンとなった後急減し、2013 年漁期まで 2.4 千～4.4 千トンで推移した。2014 年漁期には 1.4 千トンまで落ち込んだが、2016 年漁期以降増加に転じ、2019 年漁期の漁獲量は 4.8 千トンであった。本資源の資源状態について、1985 年以降の沿岸漁業による漁獲量に基づいて評価した。漁獲量の推移から、資源水準は中位であると判断した。また、直近 5 年間（2015～2019 年漁期）の漁獲量の変化から、資源動向は増加と判断した。

本資源は日本およびロシアの漁船により漁獲されているが、漁獲情報は日本漁船のものにはほぼ限定され、分布・回遊に関する情報も少ないことから、資源量推定や来遊予測は困難である。そのため ABC の算定は行わず、「令和 2（2020）年度 ABC 算定のための基本規則」2-2)により 2021 年漁期算定漁獲量を提示した。

管理基準	Target/ Limit	2021 年漁期 算定漁獲量(百トン)	漁獲割合 (%)	F 値
0.9・Cave3-yr・1.08	Target	34	—	—
	Limit	42	—	—

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、漁獲シナリオの下でより安定的な資源の維持が期待される漁獲量である。Target =  $\alpha$ Limit とし、係数  $\alpha$  には標準値 0.8 を用いた。Cave3-yr は直近 3 年間（2017～2019 年漁期）の平均漁獲量、2021 年漁期は 2021 年 4 月～2022 年 3 月である。

年	資源量 (百トン)	親魚量 (百トン)	漁獲量 (百トン)	F 値	漁獲割合 (%)
2015	—	—	14	—	—
2016	—	—	24	—	—
2017	—	—	33	—	—
2018	—	—	50	—	—
2019	—	—	48	—	—

漁期年（4 月～翌年 3 月）での値。

水準：中位 動向：増加

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲量	主要港漁業種類別水揚げ量(北海道)

## 1. まえがき

マダラは北太平洋沿岸に広く生息する冷水性の魚種である。根室海峡においては、刺網を主体とした沿岸漁業によってほぼ周年漁獲される。漁獲量の集計範囲は別海町から羅臼町までである。日本漁船のみならずロシア漁船も漁獲しているが、その漁獲情報は日本漁船のものにほぼ限定され、分布・回遊に関する情報も少ないため、資源量推定や来遊予測は困難である。

## 2. 生態

### (1) 分布・回遊

本資源は根室海峡から北方四島周辺の沿岸域および大陸棚斜面域にかけて分布している（図1、三島 1989）。

### (2) 年齢・成長

当該海域における成長は不明だが、隣接する北海道太平洋では、被鱗体長が2歳で約40 cm、3歳で約53 cm、4歳で約63 cm、5歳で約71 cm、6歳で約76 cmに成長する（図2、服部ほか 1992）。

### (3) 成熟・産卵

本資源の産卵期や成熟年齢は不明であるが、以下に記す北海道周辺の他の海域と類似していると考えられる。マダラの産卵場は北海道周辺の分布域全体に散在し、産卵親魚は沖合から沿岸へ移動して浅い海域で産卵を行う（水産庁研究部 1986、三島 1989）。北海道太平洋における産卵期は12月下旬～翌年3月で、成熟開始年齢は雄が3歳、雌が4歳である（Hattori et al. 1992、1993、濱津 1996）。北海道日本海における産卵期は12月～翌年3月上旬で、50%成熟体長は雄が約50 cm、雌が約53 cmである（北海道区底曳資源研究集団 1960、三宅・中山 1987、北海道水産林務部水産局漁業管理課・北海道立総合研究機構水産研究本部 2020a）。オホーツク海における産卵期は1～3月で（北海道区底曳資源研究集団 1960）、成熟個体は雄では体長40 cm以上、雌では体長50 cm以上で見られている（北海道水産林務部水産局漁業管理課・北海道立総合研究機構水産研究本部 2020b）。

### (4) 被捕食関係

幼魚期は主にカイアシ類を、底生生活に入ってからには主に魚類、甲殻類、頭足類および貝類を捕食している（北海道区底曳資源研究集団 1960、竹内 1961）。一方、捕食者は海獣類である（Goto and Shimazaki 1998）。

### 3. 漁業の状況

#### (1) 漁業の概要

本資源は、刺網を主体として、はえ縄や定置網などの沿岸漁業によって漁獲されている。ほぼ周年漁獲されるが、特に冬季～春季に漁獲量が多い。根室海峡において漁獲量が多い地域は羅臼町である。

#### (2) 漁獲量の推移

漁獲量は1986年漁期には7.8千トンであったが、急減し1989年漁期には1.6千トンに落ち込んだ。その後増加したが1996年漁期の8.2千トンを最高にその後急減して、1997～2013年漁期は2.4千～4.4千トンで推移した。2014年漁期にはさらに1.4千トンまで減少したが、2016年漁期以降は増加に転じ、2018年漁期の漁獲量は5.0千トンとなった。2019年漁期は、前年よりやや減少し、4.8千トンであった(図3、表1)。

ロシアの漁獲量の情報は得られていないが、参考値として「南クリル」水域(ロシア連邦が設定している漁業海区名)におけるマダラのTACの推移を示した(図4)。2005～2014年は、3.2千～6.0千トンで推移し、2015年に9.6千トンに増加した。2016年以降は7.3千～9.5千トンで推移した。

### 4. 資源の状態

#### (1) 資源評価の方法

資源評価は補足資料1に示した手順に従い実施した。本資源では漁獲努力量の情報が得られていないため、資源状態の判断には漁獲量を利用した。

#### (2) 資源量指標値の推移

資源量指標値として利用した漁獲量の推移については3.(2)の記述を参照されたい。

#### (3) 資源の水準・動向

本資源の資源水準・動向の判断には漁獲量を用いた。資源水準は、過去35年間(1985～2019年漁期)における漁獲量の平均値を50として、各年の漁獲量を指標値(資源水準値)化し、65以上を高位、35以上65未満を中位、35未満を低位とした。2019年漁期の資源水準値は62.4であったため、資源水準は中位と判断した(図5)。また、直近5年間(2015～2019年漁期)における漁獲量の推移に基づき、資源動向は増加と判断した。資源水準が昨年度の高位から中位に変わったが、2年とも高位と中位水準の境界付近であり、昨年度から資源の状態に大きな変化はないと考えられる。この2年の違いは、資源量あるいは来遊量のわずかな変動を反映したのと考えられるが、各年の漁獲努力量の情報が得られていないため詳細は不明である。

### 5. 2021年漁期漁獲量の算定

#### (1) 資源評価のまとめ

資源状態を漁獲量に基づき判断した結果、資源水準は中位、動向は増加であった。

## (2) 2021年漁期漁獲量(参考値)の算定

本資源は日本・ロシア両国の漁船により漁獲されているが、漁獲情報は日本漁船のものにほぼ限定され、分布・回遊に関する情報も少ないことから、資源量推定や来遊予測は困難である。また、日本漁船の操業海域においてのみ管理を行ってもその効果は限定的であると考えられる。このため、本資源についてはABCではなく算定漁獲量を提示している。本資源では漁獲量のみが使用できることから、資源水準および変動傾向に合わせた漁獲を行うことを管理方策とし、以下の「令和2(2020)年度ABC算定のための基本規則」2-2に基づき参考値として2021年漁期漁獲量を算定した。

$$ABC_{limit} = \delta_2 \times Ct \times \gamma_2$$

$$ABC_{target} = ABC_{limit} \times \alpha$$

$$\gamma_2 = (1 + k(b/I))$$

ここで、 $C_t$ はt年の漁獲量、 $\delta_2$ は資源水準で決まる係数、 $k$ は係数、 $b$ と $I$ はそれぞれ漁獲量の傾きと平均値、 $\alpha$ は安全率である。 $C_t$ については直近3年間(2017~2019年漁期)の平均漁獲量(44百トン)を用いた。直近3年間(2017~2019年漁期)の漁獲量の動向から $b$ (712)と $I$ (4,366)を定め、 $k$ は標準値の0.5とした。それらの値から計算される $\gamma_2$ は1.08である。本系群は、低位水準の幅が狭くなる水準定義を採用しているため、 $\delta_2$ は中位水準における推奨値の0.9とした。 $\alpha$ は標準値の0.8とした。

管理基準	Target/ Limit	2021年漁期 算定漁獲量(百トン)	漁獲割合 (%)	F値
0.9-Cave3-yr-1.08	Target	34	—	—
	Limit	42	—	—

Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量である。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、漁獲シナリオの下でより安定的な資源の維持が期待される漁獲量である。Target =  $\alpha$ Limitとし、係数 $\alpha$ には標準値0.8を用いた。Cave3-yrは直近3年間(2017~2019年漁期)の平均漁獲量、2021年漁期は2021年4月~2022年3月である。

## (3) 算定漁獲量の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2018年漁獲量確定値 2019年漁獲量更新値	2017、2018年漁期漁獲量

評価対象年 (当初・再評価)	管理 基準	F 値	資源量 (百トン)	算定漁獲量 Limit (百トン)	算定漁獲量 Target (百トン)	漁獲量 (百トン)
2019年漁期 (当初)	0.9・Cave3-yr・1.20	—	—	26	21	
2019年漁期 (2019年再評価)	0.9・Cave3-yr・1.20	—	—	26	21	
2019年漁期 (2020年再評価)	0.9・Cave3-yr・1.20	—	—	26	21	48
2020年漁期 (当初)	1.0・Cave3-yr・1.18	—	—	42	34	
2020年漁期 (2020年再評価)	1.0・Cave3-yr・1.18	—	—	42	34	

算定漁獲量は ABC 算定規則 2-2)に基づき計算した。2019年漁期(2020年再評価)および2020年漁期(2020年再評価)の算定漁獲量に変更はない。

## 6. その他の管理方策の提言

未成魚を成熟するまで獲り残して再生産に寄与させることが本資源を持続的に利用する上で重要であると考えられる。よって、未成魚に対して過度の漁獲圧がかからないようにすることが望ましい。本資源の動向をより詳細に把握するには、日本漁船とロシア漁船の漁獲努力量把握が必要である。

## 7. 引用文献

- Goto, Y. and K. Shimazaki (1998) Diet of Steller sea lions off the coast of Rausu, Hokkaido, Japan. *Biosphere Conservation*, **1**, 141-148.
- 濱津友紀 (1996) 北海道東部太平洋沿岸におけるマダラの成熟度と孕卵数. 漁業資源研究会西日本底魚部会報, **23**, 3-9.
- 服部 努・桜井泰憲・島崎健二 (1992) マダラの耳石薄片法による年齢査定と成長様式. 日水誌, **58**, 1203-1210.
- Hattori, T., Y. Sakurai and K. Shimazaki (1992) Maturation and reproductive cycle of female Pacific cod in waters adjacent to the southern coast of Hokkaido, Japan. *Nippon Suisan Gakkaishi*, **58**, 2245-2252.
- Hattori, T., Y. Sakurai and K. Shimazaki (1993) Maturity and reproductive cycle based on the spermatogenesis of male Pacific cod, *Gadus macrocephalus*, in waters adjacent to the southern

- coast of Hokkaido, Japan. Sci. Rep. Hokkaido Fish. Exp. Stn., **42**, 265-272.
- 北海道区底曳資源研究集団 (1960) タラ. 「北海道中型機船底曳網漁業」北海道機船漁業協同組合連合会, 札幌, 63-64.
- 北海道水産林務部水産局漁業管理課・北海道立総合研究機構水産研究本部 (2020a) マダラ日本海海域. 北海道水産資源管理マニュアル 2019 年度, p. 10
- 北海道水産林務部水産局漁業管理課・北海道立総合研究機構水産研究本部 (2020b) マダラオホーツク海海域. 北海道水産資源管理マニュアル 2019 年度, p. 12
- 三島清吉 (1989) 日本周辺におけるマダラ (*Gadus macrocephalus* TILESIIUS) の資源とその生物学的特性. 北太平洋漁業国際委員会研究報告, **42**, 172-179.
- 三宅博哉・中山信之 (1987) 日本海武蔵堆海域におけるマダラの成熟体長と産卵期. 北水試月報, **44**, 209-216.
- 水産庁研究部 (1986) 底びき網漁業資源, 234 pp.
- 竹内 勇 (1961) 北海道沿岸のタラ科幼魚の餌料. 北水試月報, **18**, 329-336.

(執筆者：河村眞美、千村昌之、境 磨、濱津友紀)

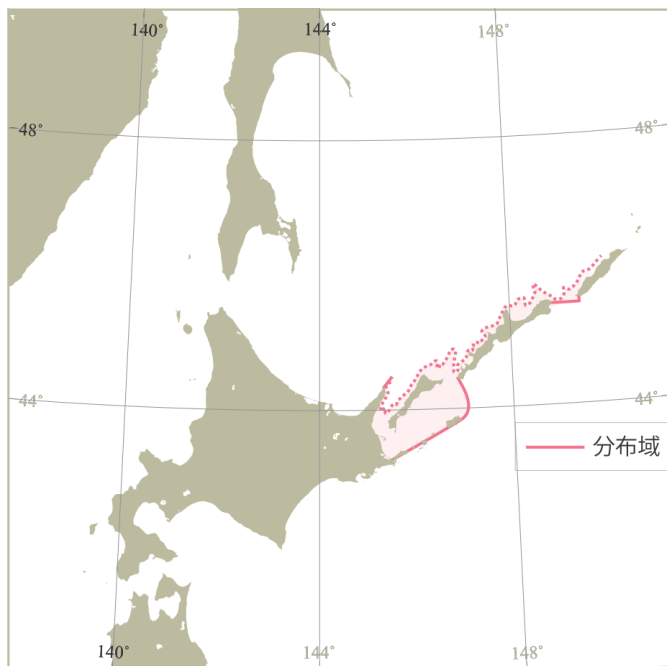


図1. 根室海峡周辺におけるマダラの分布図（三島 1989 より作図）

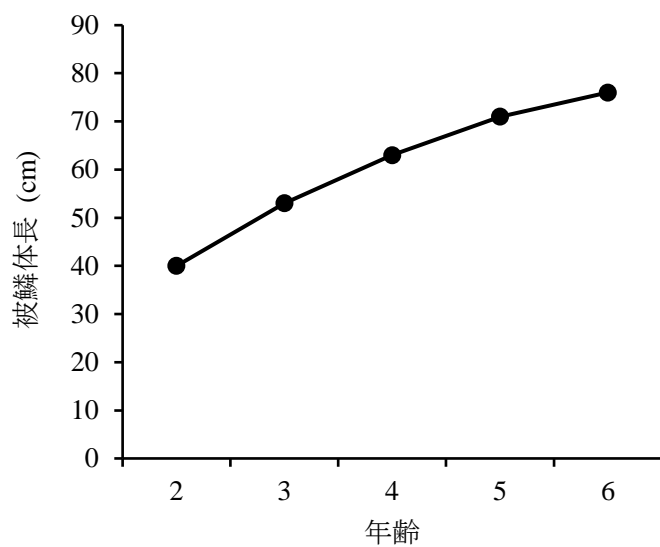


図2. 根室海峡に隣接する北海道太平洋におけるマダラの成長（服部ほか 1992 より作図）

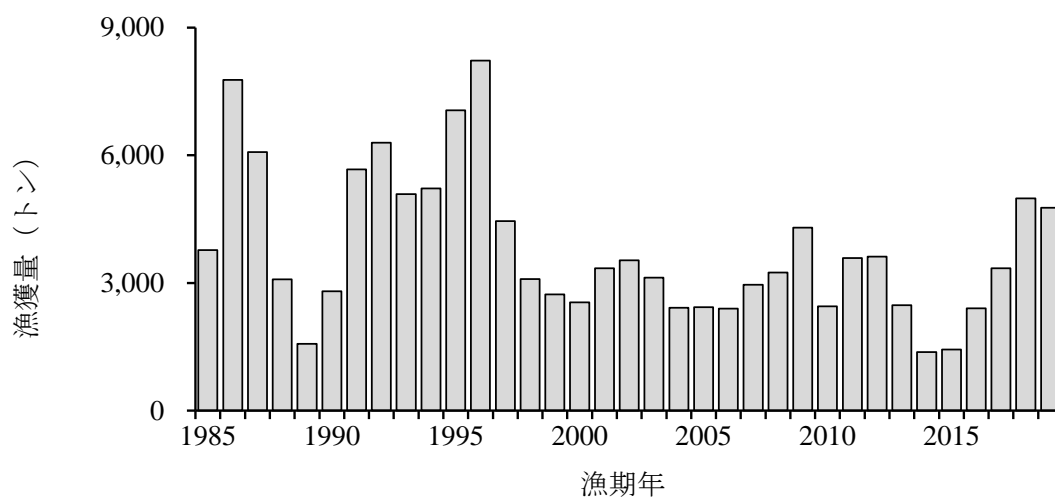


図3. 根室海峡におけるマダラの漁獲量 漁期年は4月～翌年3月。

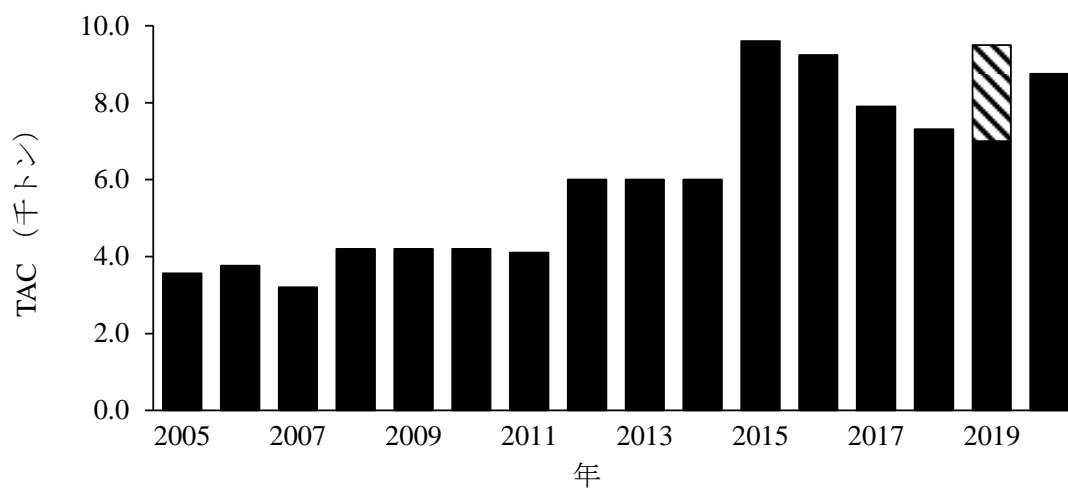


図4. 「南クリル」(ロシア連邦が設定している漁業海区名)におけるマダラのTAC  
斜線は期中改定による増加分を示す。



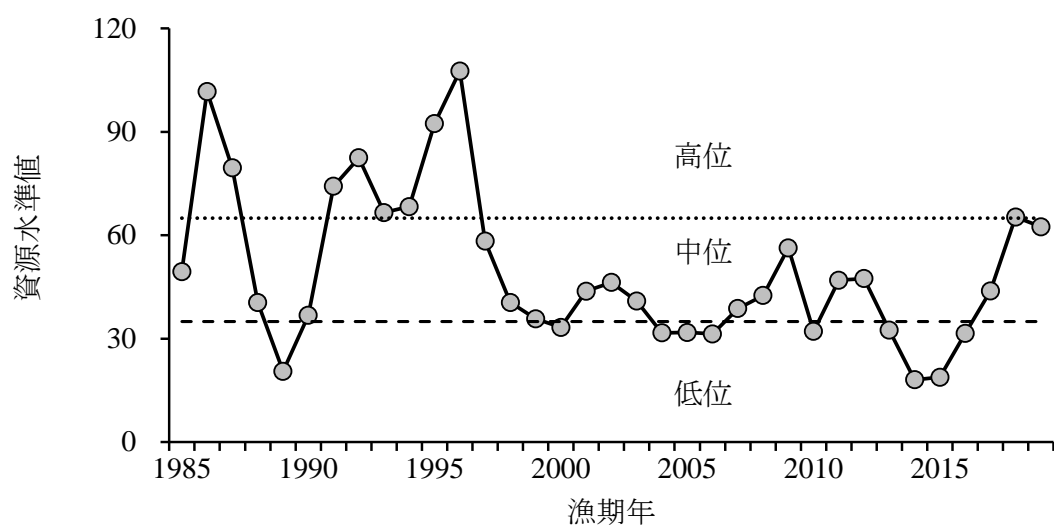


図 5. 根室海峡のマダラの資源水準値 過去 35 年間（1985～2019 年漁期）における漁獲量の平均値を 50 とし、35 未満を低位、35 以上 65 未満を中位、65 以上を高位とした。

表 1. 根室海峡におけるマダラの漁獲動向

漁期年	漁獲量 (トン)
1985	3,774
1986	7,767
1987	6,073
1988	3,087
1989	1,567
1990	2,807
1991	5,667
1992	6,298
1993	5,084
1994	5,217
1995	7,057
1996	8,221
1997	4,449
1998	3,092
1999	2,731
2000	2,541
2001	3,343
2002	3,535
2003	3,125
2004	2,419
2005	2,428
2006	2,396
2007	2,958
2008	3,247
2009	4,301
2010	2,451
2011	3,584
2012	3,621
2013	2,476
2014	1,379
2015	1,434
2016	2,404
2017	3,345
2018	4,984
2019	4,769

集計範囲：別海町から羅臼町。

漁期年は4月～翌年3月。

2019年漁期の数値は暫定値。

補足資料 1 資源評価の流れ

